

十三夜

樋口一葉

青空文庫

上

例いづもは威勢よき黒ぬり車の、それ門かどに音が止まつた娘ではないか
 と両親ふたおやに出迎はれつる物を、今宵こよひは辻つちより飛とびのりの車さへ歸し
 て悄しよんぼり然然と格子戸かうしどの外外に立てば、家内うちには父親が相かはらずの
 高声、いはば私わしも福人ふくじんの一人、いづれも柔順おとなしい子供を持つて
 育てるに手は懸かからず人には褒められる、分外の欲さへ渴かねばこ
 の上に望みもなし、やれやれ有難い事と物がたられる、あの相手
 は定めし母様ははさん、ああ何も御存じなしにあのやうに喜んでお出遊いで
 ばす物を、どの顔さげて離縁状もらふて下されと言はれた物か、

叱しかられるは必定、太郎と言ふ子もある身にて置いて駆け出して
来るまでには種いろいろ々思案もし尽しての後のちなれど、今更にお老人としより
を驚かしてこれまでの喜びを水の泡あわにさせます事つらや、寧いっそ
話さずに戻ろうか、戻れば太郎の母と言はれて何時いついつ々々までも原
田の奥様、御両親に奏任むこの賀がある身と自慢させ、私わたしさへ身を節つ
儉めれば時たまはお口に合ふ物お小遣こづかひも差あげられるに、思ふま
まを通して離縁とならば太郎には継母ままははの憂うき目を見せ、御両親
には今までの自慢の鼻にはかに低くさせまして、人の思はく、弟おとと
の行末、ああこの身一つの心から出世しんの真まも止めずはならず、戻
らうか、戻らうか、あの鬼のやうな我良人わがつまのもとに戻らうか、あ
の鬼の、鬼の良人つまのもとへ、ゑゑ厭いや厭いやと身をふるはす途端、

よろよるとして思はず格子にがたりと音さすれば、誰れだと大きく父親の声、道ゆく悪太郎の悪戯いたづらとまがへてなるべし。

外なるはおほほと笑ふて、お父様とつさん私で御座んすといかにも可愛わゆき声、や、誰れだ、誰れであつたと障子を引明ひきあけて、ほうお関か、何だなそんな処ところに立つてゐて、どうして又このおそくに出かけて来た、車もなし、女中も連れずか、やれやれま早く中へ這入れ、さあ這入れ、どうも不意に驚かされたやうでまごまごするわな、格子は閉めずとも宜よい私わしが閉める、ともかくも奥いが好い、ずつとお月様のさす方へ、さ、蒲団ふとんへ乗れ、蒲団へ、どうも畳が汚ないので大屋に言つては置いたが職人の都合があると言ふてな、遠慮も何も入らない着物がたまらぬからそれを敷ひてくれ、やれ

やれどうしてこの遅くに出て来たお宅うちでは皆お変りもなしかと例
に替らずもてはやさるれば、針の席むしろにのる様にて奥さま扱かひ情
なくじつと涕なみだを呑のみ込こんで、はい誰れも時候の障さわりも御座りませぬ、
私は申まをしわけ 訳のない御無沙汰してをりましたが貴君あなたもお母様つかさんも御
機嫌よくいらつしやりますかと問へば、いやもう私わしくさみは噓一つせぬ
位、お袋は時たま例の血の道と言ふ奴を始めるがの、それも蒲団
かぶつて半日も居ればけろけろとする病だから子細はなしさと元
氣よく呵からから々と笑ふに、亥みの之のさんが見えませぬが今晚は何処どちらへか
参りましたか、あの子も替らず勉強で御座んすかと問へば、母親
はほたほたとして茶を進めながら、亥之は今しがた夜学ゆきに出て行
ました、あれもお前かけお蔭さまでこの間は昇給させて頂いたし、課

長様が可愛がつて下さるのでどれ位心丈夫であらう、これと言ふもやつぱり原田さんの縁引が有るからだとして宅では毎日いひ暮してゐます、お前に如才は有るまいけれどこの後とも原田さんの御機嫌の好いやうに、亥之はあの通り口の重い質だし何れお目に懸つてもあつけない御挨拶よりほか出来まいと思はれるから、何分ともお前が中に立つて私どもの心が通じるやう、亥之が行末をもお頼み申て置いておくれ、ほんに替り目で陽気が悪いけれど太郎さんは何時も悪戯をしてゐますか、何故に今夜は連れてお出でない、お祖父さんも恋しがつてお出なされた物と言はれて、又今更にうら悲しく、連れて来やうと思ひましたけれどあの子は宵まどひでもう疾うに寐ましたからそのまま置いて参りました、本当

に悪戯いたづらばかりつものりまして聞わけとては少しもなく、外へ出れば跡を追ひまするし、家内うちに居れば私の傍わらわばかり覗ねらふて、ほんにほんに手が懸かつて成ませぬ、何故なぜあんなで御座りませうと言ひかけて思ひ出しの涙むねの中に漲みなぎるやうに、思ひ切つて置いては来たれど今頃は目を覚さまして母かかさん母さんと婢女をんなどもを迷惑まごがらせ、煎餅おせんやおこしの哆たらしも利きかで、皆々手を引いて鬼おにに喰くはすと威おどかしてでもゐるやう、ああ可愛かわいさうな事をと声たてても泣きたきを、さしも両ふたおや親おやの機嫌きげんよげなるに言ひ出いでかねて、烟けむりにまぎらす烟草たばこ二三服さんさんぷく、空からせき咳せきこんこんとして涙なみだを襦袢じゆばんの袖そでにかくしぬ。

今宵は旧曆の十三夜、旧弊なれどお月見の真似事に団子いししいしをこしらへてお月様にお備へ申せし、これはお前も好物なれば少々な

りとも亥之助に持たせて上やうと思ふたれど、亥之助も何か極きまりを悪るがつてその様な物はお止よしなされと言ふし、十五夜にあげなんだから片月かたつきみ見に成つても悪るし、喰べさせたいと思ひながら思ふばかりで上る事が出来なんだに、今夜来てくれるとは夢の様な、ほんに心が届いたのであらう、自宅うちで甘い物うまはいくらも喰べやうけれど親のこしらいたは又別物、奥様氣を取すてて今夜は昔しのお関になつて、見得を構かまはず豆なり栗なり氣に入つたを喰べて見せておくれ、いつでも父様ととさんと噂うわさすること、出世は出世に相違なく、人の見る目も立派なほど、お位の宜いい方々や御身分なかつのある奥様がたとの御交際おつきあひもして、ともかくも原田の妻と名告なのつて通るには氣骨の折れる事もあらう、女子をんなどもの使ひやう出入りの者の

行渡り、人の上に立つものはそれだけに苦勞が多く、里方がこの
 様な身柄では猶なほさら更のこと人に侮あなどられぬやうの心懸けもしなければ
 成るまじ、それを種さまざま々に思ふて見ると父ととさんだとして私だとして孫
 なり子なりの顔の見たいは当あたりまへ然あなれど、余あんまりうるさく出入り
 をしてはと控へられて、ほんに御門の前を通る事はありとも木綿
 着物に毛けじゆす繻子の洋傘かふもりさした時には見す見すお二階すだれの簾を見なが
 ら、ああ吁あお関は何をしてゐる事かと思ひやるばかり行過ゆきすぎてしまひ
 まする、実家でも少し何とか成つてゐたならばお前の肩身も広か
 らうし、同じくでも少しは息のつけやう物を、何を云ふにもこの
 通り、お月見の団いしいし子をあげやうにも重箱おちうからしてお恥かしいで
 は無からうか、ほんにお前の心遣ひが思はれると嬉しき中にも思

ふままの通路が叶かなはねば、愚痴のトつかみ賤いやしき身分を情なげに言はれて、本当に私は親不孝だと思ひまする、それは成程やは和らかひ衣きもの類のきて手車のに乗りあるく時は立派らしくも見えませうけれど、父ととさんや母かかさんにかうして上やうと思ふ事も出来ず、いはば自分の皮一重、寧いっそ賃仕事してもお傍で暮した方が余よつほど快よう御座いますと言ひ出すに、馬鹿、馬鹿、その様な事を仮にも言ふてはならぬ、嫁に行つた身が実家さとの親みつきの貢ぎをするなどと思ひも寄らぬこと、家うちに居る時は斎藤の娘、嫁入つては原田の奥方ではないか、勇いさむさんの氣に入る様にして家の内を納めてさへ行けば何の子細は無い、骨が折れるからとてそれだけの運のある身ならば堪へられぬ事は無い筈はず、女などと言ふ者はどうも愚痴で、お袋な

どがつまらぬ事を言ひ出すから困り切る、いやどうも団子を喰べさせる事が出来ぬとて一日大立腹であつた、大分熱心で調製こしらへたものと見えるから十分に喰べて安心させて遣つてくれ、余程甘うまからうぞと父てておや親おじけの滑稽を入れるに、再び言ひそびれて御馳走の栗枝豆あづきありがたく頂戴をなしぬ。

嫁入りてより七年の間、いまだに夜よに入りて客に來しこともなく、土産もなしに一人歩行あるきして來るなど悉しつかい皆ためしのなき事なるに、思ひなしか衣類いづもも例ほど燦きらびやかならず、稀まれに逢あひたる嬉しさにさのみは心も付かざりしが、聳しほよりの言伝とて何一言の口上もなく、無理に笑顔は作りながら底に萎しほれし処のあるは何か子細のなくては叶はず、父てておや親は机の上の置時計を眺めて、これやモウ

程なく十時になるが関は泊つて行つて宜いのかの、帰るならばもう帰らねば成るまいぞと氣を引いて見る親の顔、娘は今更のやうに見上げて御父様おとつさ私は御願ひがあつて出たので御座ります、どうぞ御聞遊してときつとなつて畳に手を突く時、はじめて一トしづく幾層いくその憂きを洩しもらそめぬ。

父は穩かならぬ色を動かして、改まつて何かのと膝ひざを進めれば、わたし私は今宵限り原田へ帰らぬ決心で出て参つたので御座ります、勇が許して参つたのではなく、あの子を寐ねかして、太郎を寐かしてつけて、最早もとうあの顔を見ぬ決心で出て参りました、まだ私の手より外誰れの守りでも承しょうち諾せぬほどのあの子を、欺だまして寐かして夢の中に、私は鬼に成つて出て参りました、御父様おとつさん、御母様おつかさん、

察して下さりませ私は今日まで遂ひに原田の身に就いて御耳に入
 れました事もなく、勇と私との中なかを人に言ふた事は御座りませぬ
 けれど、千度ちたびも百度もたびも考へ直して、二年も三年も泣なき尽つくして今
 日といふ今日どうでも離縁を貰もろふて頂かうと決心の臍ほぞをかためま
 した、どうぞ御願ひで御座ります離縁の状を取つて下され、私は
 これから内職なり何なりして亥之助が片腕にもなられるやう心が
 けますほどに、一生一人で置いて下さりませとわつと声たてるを
 噛かみしめる襦袢の袖、墨絵の竹も紫竹しちくの色にや出ると哀いづれなり。

それはどういふ子細でと父も母も詰寄つて問かかるに今までは
 黙つてゐましたれど私の家うちの夫婦めをとさし向ひを半日見て下さつたら
 大底が御解りに成ませう、物言ふは用事のある時慳けん貪どんに申まをつけ

られるばかり、朝起まして機嫌をきけば不^ふ図^と脇^{わき}を向ひて庭の草花
 を態^{わざ}とらしき褒^ほめ詞^{ことば}、これにも腹はたても良^{おつと}人の遊ばす事なれ
 ばと我慢して私は何も言葉あらそひした事も御座んせぬけれど、
 朝^{あさはん}飯^{はん}あがる時から小言は絶えず、召使の前にて散々と私が身の
 不器用不作法を御並べなされ、それはまだまだ辛棒もしませうけ
 れど、二言目には教育のない身、教育のない身と御^{おさげす}蔑^{げす}みなさる、
 それは素^{もと}より華族女学校の椅子^{いす}にかかつて育つた物ではないに相
 違なく、御同僚の奥様がたの様にお花のお茶の、歌の画のと習ひ
 立てた事もなければその御話しの御相手は出来ませぬけれど、出
 来ずは人知れず習はせて下さつても済むべき筈、何も表向き実家
 の悪^ふるい^うを風^{ふう}聴^{ちやう}なされて、召使ひの婢^{をんな}女^などもに顔の見られる

やうな事なさらずとも宜かりさうなもの、嫁入つて丁度半年ばかりの間は関や関やと下へも置かぬやうにして下さつたけれど、あの子が出来てからと言ふ物はまるで御人が変りまして、思ひ出しても恐ろしう御座ります、私はくら暗やみの谷へ突落されたやうに暖かい日の影といふを見た事が御座りませぬ、はじめの中は何か串じようだんようだんに態わざとらしく邪じやくん慳けんに遊ばすのと思ふてをりましたけれど、全くは私に御飽きなされたのでこうもしたら出てゆくか、ああもしたら離縁をと言ひ出すかと苦いぢめて苦めて苦め抜くので御座りましょ、御父様も御母様も私わたしの性分は御存じ、よしや良人が芸者狂りんきひなさらうとも、困こい者して御置きなさらうともそんな事にうわさする私でもなく、侍婢をんなどもからそんな噂うわきも聞えますするけれどあれ

ほど働きのある御方なり、男の身のそれ位はありうちと他^{よそ}処^{ゆき}行に
 は衣類^{めしもの}にも気をつけて気に逆らはぬやう心がけておりまするに、
 唯^{ただ}もう私の為^する事とては一から十まで面白くなく覺しめし、箸^{はし}の
 上げ下^{おろ}しに家の内の楽しくないは妻が仕方が悪るいからだ^{おつ}と仰し
 やる、それもどういふ事が悪い、此^{ここ}処^こが面白くないと言ひ聞かし
 て下さる様ならば宜けれど、一筋につまらぬくだらぬ、解らぬ奴、
 とても相談の相手にはならぬの、いはば太郎の乳母^{うば}として置いて
 遣^{つか}はすのと嘲^{あざけ}つて仰しやるばかり、ほんに良人といふではなくあ
 の御方は鬼で御座りまする、御自分の口から出てゆけとは仰しや
 りませぬけれど私がこの様な意久地^{かぢ}なしで太郎の可愛^{かわゆ}さに気が引
 かれ、どうしても御詞に異背せず唯^{はいはい}々と御小言を聞いております

れば、張も意気地もない愚うたらぬの奴、それからして気に入らぬと仰しやりまする、さうかと言つて少しなりとも私の言条を立てて負けぬ氣に御返事をしましたらそれを取てに出てゆけと言はれるは必定、私は御母様出て来るのは何でも御座んせぬ、名のみ立派の原田勇に離縁されたからとて夢さら残りをしいとは思ひませぬけれど、何にも知らぬあの太郎が、片親に成るかと思ひますると意地もなく我慢もなく、詫て機嫌を取つて、何でも無い事に恐れ入つて、今日までも物言はず辛棒してをりました、御父様、御母様、私は不運で御座りますとて口惜しさ悲しさ打出し、思ひも寄らぬ事を談れば両親は顔を見合せて、さてはその様の憂き中かと呆れて暫時いふ言もなし。

母親は子に甘きならひ、聞く毎々ことごとに身にしみて口惜くちをしく、父と
とさん様は何と思しおぼ召すか知らぬが元もともと来此方こちから貰ふて下されと願
 ふて遣つた子ではなし、身分が悪いの学校がどうしたのと宜くも
 宜くも勝手な事が言はれた物、先方さきは忘れたかも知らぬが此方こちは
 たしかに日まで覚えてゐる、阿関おせきが十七の御正月、まだ門松を取
 もせぬ七日の朝の事であつた、旧もとの猿楽町さるがくちょうのあの家の前うちで御隣
 の小ちいさい娘と追羽根して、あの娘の突いた白い羽根が通り掛つた
 原田さんの車の中へ落たとつて、それをば阿関が貰ひに行きしに、
 その時はじめて見たとか言つて人橋かけてやいやいと貰ひたがる、
 御身分がらにも釣合ひませぬし、此方こちはまだ根つからの子供で何
 も稽古事けいこごとも仕込んで置ませず、支度とても唯今の有様で御座

いますからとて幾度断つたか知れはせぬけれど、何も舅姑のや
かましいが有るでは無し、我が欲しくて我が貰ふに身分も何も言
ふ事はない、稽古は引取つてからでも充分させられるからその心
配も要らぬ事、とかくくれさへすれば大事にして置かうからとそ
れはそれは火のつく様に催促して、此方から強請た訳ではなけれ
ど支度まで先方で調へて謂はば御前は恋女房、私や父様が遠慮し
てさのみは出入りをせぬといふも勇さんの身分を恐れてでは無い、
これが妾手かけに出したのではなし正當にも正當にも百まん
だら頼みによこして貰つて行つた嫁の親、大威張に出這入しても
差つかへは無けれど、彼方が立派にやつてゐるに、此方がこの通
りつまり活計をしてゐれば、御前の縁にすがつて聳の助力を受

けもするかと他人様ひとさまの 処おもはく 思くちをが口惜くちをしく、瘦やせ我慢では無けれど
 交つきあひ際あひだけは御身分相応に尽して、平へいぜい常は逢あいたい娘の顔も見
 ずずにゐまする、それをば何の馬鹿々々しい親なし子でも拾つて行
 つたやうに大層らしい、物が出来るの出来ぬのと宜くそんな口が
 利きけた物、黙つてゐては際限もなく募つてそれはそれは癖くせに成つ
 てしまひます、第一は婢女をんなどもの手前奥様の威光いきが削そげて、末に
 は御前の言ふ事を聞く者もなく、太郎を仕立るにも母はは様さんを馬鹿
 にする気になられたら何としまする、言ふだけの事はきつと言ふ
 て、それが悪わるいと小言をいふたら何の私にも家が有ますとて出
 て来るが宜からうでは無いか、実ほんに馬鹿々々しいとつてはそれほ
 どの事を今日が日まで黙つてゐるといふ事が有ります物か、余あんまり

御前が温順し過るから我儘がつのであら、聞いたばかりでも腹が立つ、もうもう退けてゐるには及びません、身分が何であらうが父もある母もある、年はゆかねど亥之助といふ弟もあればその様な火の中にじつとしてゐるには及ばぬこと、なあ父様一遍勇さんに逢ふて十分油を取つたら宜う御座りましょと母は猛つて前後もかへり見ず。

父親は先刻より腕ぐみして目を閉ぢて有けるが、ああ御袋、無茶の事を言ふてはならぬ、我しさへ始めて聞いてどうした物かと思案にくれる、阿関の事なれば並大底でこんな事を言ひ出しさうにもなく、よくよく愁らさに出て来たに見えるが、して今夜は聳どのは不在か、何か改たまつての事件でもあつてか、いよいよ

離縁するとも言はれて来たのかと落ついて問ふに、良人おつとは一昨おと
とひ日より家へとは帰られませぬ、五日六日と家を明けるは平常つねの
 事、さのみ珍らしいとは思ひませぬけれど出際でぎはに召物の揃そろへかた
 が悪いとて如何いかほど詫びても聞入れがなく、其品それをば脱いで擲たき
 つけて、御自身洋服にめしかへて、呸あゝ、私位ぐらゐ不仕合の人間はある
 まい、御前のやうな妻を持つたのはと言ひ捨てに出て御出で遊し
 ました、何といふ事で御座りませう一年三百六十五日物いふ事も
 無く、稀たま々言はれるはこの様な情ない詞をかけられて、それで
 も原田の妻と言はれたいか、太郎の母さくらぶで候と顔おし拭ぬぐつてゐる心
 か、我身ながら我身の辛棒がわかりませぬ、もうもうもう私は良つ
 人まも子も御座んせぬ嫁入せぬ昔しと思へばそれまで、あの頑つ是な

い太郎の寝顔を眺めながら置いて来るほどの心になりましたからは、もうどうでも勇の傍に居る事は出来ませぬ、親はなくとも子は育つと言ひまするし、私の様な不運の母の手で育つより継母御なり御手かけなり気に適かなふた人に育てて貰ふたら、少しは父御も可愛かわゆがつて後々のちのちあの子の為にも成ませう、私はもう今宵こよひかぎりどうしても帰る事は致しませぬとて、断つても断てぬ子の可憐かわゆさに、奇麗に言へども詞はふるへぬ。

父は歎たんそく息して、無理は無い、居ゐ愁づらくもあらう、困つた中に成つたものよと暫時阿閑しばらんの顔を眺めしが、大丸鬚おほまるまげに金輪きんわの根を巻くろちりめんきて黒縮緬くろちりめんの羽織何の惜しげもなく、我が娘ながらもいつしか調ふ奥様風、これをば結び髪に結びかへさせて綿銘仙めんめいせんの半天

に襷たすきがけの水仕業みづしわざさする事いかにして忍しのばるべき、太郎といふ
 子もあるものなり、一端の怒りに百年の運を取はづして、人には
 笑はれものとなり、身はいにしへの斎藤主計かすへが娘に戻らば、泣く
 とも笑ふとも再ふたたび度原田太郎が母とは呼ばるる事成るべきにもあ
 らず、良人おつとに未練は残さずとも我が子の愛の断ちがたくは離れて
 いよいよ物をも思ふべく、今の苦勞を恋しがる心も出いづべし、か
 く形よく生れたる身の不ふし幸やはせ、不相応の縁まぎにつながれて幾らの
 苦勞をさする事と哀れさの増れども、いや阿闍あせつこう言ふと父が無
 慈悲で汲取くみとつてくれぬのと思ふか知らぬが決して御前ごぜんを叱しかるで
 はない、身分が釣合はねば思ふ事も自然違ふて、此方こちらは真しんから尽
 す気でも取りやうに寄つては面白くなく見える事もあらう、勇さ

んだからとてあの通り物の道理を心得た、利発の人ではあり随分
学者でもある、無茶苦茶にいちめ立る訳ではあるまいが、得て世
間に褒め物の敏腕家などと言はれるは極めて恐ろしい我まま物、
外では知らぬ顔に切つて廻せど勤め向きの不平などまで家内へ帰
つて当りちらされる、的に成つては随分つらい事もあらう、なれ
どもあれほどの良人を持つ身のつとめ、区役所がよひの腰弁当が
釜かまの下を焚たきつけてくれるのとは格が違ふ、随したがつてやかましく
もあらうむづかしくもあらうそれを機嫌の好い様にととのへて行
くが妻の役、表面うわべには見えねど世間の奥様といふ人達の何れいづも面
白くをかしき中ばかりは有るまじ、身一つと思へば恨みも出る、
何のこれが世の勤めなり、殊ことにはこれほど身がらの相違もある事

なれば人一倍の苦もある道理、お袋などが口広い事は言へど亥之
 が昨今の月給に有ついたも必^{ひつきやう} 竟は原田さんの口入れではなか
 らうか、七光どころか十光^{とひかり}もして間接^{よそ}ながらの恩を着ぬとは言
 はれぬに愁^つらからうとも一つは親の為弟^{おとと}の為、太郎といふ子もあ
 るものを今日までの辛棒がなるほどならば、これから後^ごとて出来
 ぬ事はあるまじ、離縁を取つて出たが宜^よいか、太郎は原田のもの、
 其方^{そち}は斎藤の娘、一度縁が切れては二度と顔見にゆく事もなるま
 じ、同じく不運に泣くほどならば原田の妻で大泣きに泣け、なあ
 関さうでは無いか、合点^{がてん}がいつたら何事も胸に納めて、知らぬ顔
 に今夜は帰つて、今まで通りつつしんで世を送つてくれ、お前が
 口に出さんとても親も察する弟も察する、涙は各自^{てんで}に分^{わけ}て泣かう

ぞと因果を含めてこれも目を拭ふに、阿閼はわつと泣いてそれでは離縁をといふたも我ままで御座りました、成程太郎に別れて顔も見られぬ様にならばこの世に居たとて甲斐かひもないものを、唯目ただの前の苦をのがれたとてどうなる物で御座んせう、ほんに私さへ死んだ氣になれば三方四方波風たたず、ともあれあの子も両親の手で育てられまするに、つまらぬ事を思ひ寄よりまして、貴君にまで嫌いやな事を御聞かせ申まをしました、今宵限り関はなくなつて魂一つがあの子の身を守るのと思ひますれば良人のつらく当る位百年も辛棒出来さうな事、よく御言葉も合点が行きました、もうこんな事は御聞かせ申ませぬほどに心配をして下さりますなとて拭ふあとから又涙、母親は声たてて何といふこの娘こは不仕合と又一しきり

大泣きの雨、くもらぬ月も折から淋しくて、うしろの土手の自しぜん
 然ばへ生を弟の亥之が折て来て、瓶びんにさしたる薄すすきの穂の招く手振り
 も哀れなる夜よなり。

実家は上野の新坂下、駿するがだい河台への路なれば茂れる森の木このし
 た暗侘やわびしけれど、今宵は月もさやかなり、広ひろこうち小路へ出いづれば昼も
 同様、雇ひつけの車宿とて無き家なれば路みちゆく車を窓から呼んで、
 合点が行つたらともかくも帰れ、主人あるじの留守ことほりに断なしの外出、こ
 れを咎とがめられるとも申訳の詞は有るまじ、少し時刻は遅れたれど
 車ならばつひ一ト飛とび、話しは重ねて聞きに行かう、先まづ今夜は帰
 つてくれとて手を取つて引ひき出いだすやうなるも事だてあら立だてじの親の慈
 悲、阿閼はこれまでの身と覚悟してお父とつさん様、お母つかさん様、今夜の事

はこれ限り、帰りまするからは私は原田の妻なり、良人を誹そしるは
濟みませぬほどにもう何も言ひませぬ、関は立派な良人を持つた
ので弟の為にも好い片腕、ああ安心なと喜んでゐて下されば私は
何も思ふ事は御座んせぬ、決して決して不了簡など出すやうな事
はしませぬほどにそれも案じて下さりますな、私の身体からだは今夜を
はじめに勇のものだと思ひまして、あの人の思ふままに何となり
して貰もらひましょ、それではもう私は戻ります、亥之さんが帰つた
らば宜よろしくいふて置いて下され、お父とつさん様もお母つかさん様も御機嫌よう、
この次には笑ふて参りまするとて是非なささうに立あがれば、母
親は無けなしの巾きんちやく着着さげて出て駿河台まで何程いくらでゆくと門かどな
る車夫に声をかくるを、あ、お母様それは私がやりまする、有が

たう御座んしたと温順おとなしく挨拶して、格子戸かうしどくぐれば顔に袖そで、涙をかくして乗り移る哀れさ、家うちには父が咳せきばら払ひのこれもうるめる声成なりし。

下

さやけき月に風のおと添ひて、虫の音ねたえだえに物がなしき上野へ入りてよりまだ一町もやうやうと思ふに、いかにしたるか車夫はびつたりと轆かぢを止めて、誠に申かねましたが私はこれで御免を願ひます、代は入りませぬからお下りおなすつてと突だしぬけ然けにはれて、思ひもかけぬ事なれば阿閼は胸をどつきりとさせて、あれ

お前そんな事を言つては困るではないか、少し急ぎの事でもあり増しは上げやうほどに骨を折つておくれ、こんな淋しい処では代りの車も有るまいではないか、それはお前人困らせといふ物、愚図らずに行つておくれと少しふるへて頼むやうに言へば、増しが欲しいと言ふのでは有ませぬ、私からお願ひですどうぞお下りなすつて、もう引くのが厭いやに成つたので御座りますと言ふに、それではお前加減でも悪るいか、まあどうしたと言ふ訳、此処ここまで挽ひいて来て厭やに成つたでは済むまいがねと声に力を入れて車夫を叱れば、御免なさいまし、もうどうでも厭やに成つたのですからとて提ちようちん燈もちを持しまま不図わき脇へのがれて、お前は我ままの車くるま夫まさんだね、それならば約定きめの処までとは言ひませぬ、代りの

ある処とこまで行つてくれればそれでよし、代はやるほどに何処そこか
処こらまで、切せめて広小路までは行つておくれと優しい声にすかす
様にいへば、なるほど若いお方ではありこの淋しい処へおろされ
ては定めしお困りなさりませう、これは私が悪う御座りました、
ではお乗せ申ませう、お供を致しませう、さぞお驚きなさりまし
たらうとて悪わる者らしくもなく提燈を持かゆるに、お関もはじめて
胸をなで、心丈夫に車夫の顔を見れば二十五六の色黒く、小男の
瘦やせぎす、あ、月に背そむけたあの顔が誰たれやらで有つた、誰れやら
に似てゐると人の名も咽のど元もとまで転ころがりながら、もしやお前さん
はと我知らず声をかけるに、ゑ、と驚いて振あふぐ男、あれお前
さんはあのお方では無いか、私をよもお忘れはなさるまいと車

より^{すべ}凜るやうに下りてつくづくと打まもれば、貴嬢^{あなた}は齋藤の阿闍
 さん、面目も無いこんな姿^{なり}で、背後^{うしろ}に目が無ければ何の気もつか
 ずにいきました、それでも音^{もの}声^{ごゑ}にも心づくべき筈^{はず}なるに、私は余
 程^{つほど}の鈍に成りましたと下を向いて身を恥れば、阿闍^{つむり}は頭の先よ
 り爪^{つまさき}先まで眺めていゑいゑ私だとして往来^{いきあ}で行逢ふた位ではよも
 や貴君^{あなた}と気は付きますまい、唯^{たつ}た今の先までも知らぬ他人^{くるま}の車
 夫^やさんとのみ思ふてゐましたに御存じないは、当^{あたりまへ}然^{もつたい}、勿^{もつたい}体
 ない事であつたれど知らぬ事なればゆるして下され、まあ何時^{いつ}か
 らこんな業^{こと}して、よくそのか弱い身に障りもしませぬか、伯母^{おば}さ
 んが田舎へ引取られてお出^{いで}なされて、小川^{をがはまち}町のお店^{みせ}をお廃^やめな
 されたといふ噂^{うわさ}は他^よ処^そながら聞いてもゐましたれど、私も昔^{むかし}の

身でなければ種々いろいろと障る事があつてな、お尋ね申すは更なるこ
 と手紙あげる事も成ませんかつた、今は何処に家を持つて、お内
 儀みさんも御健勝おまめか、小児ちっさいのも出来てか、今も私は折ふし小川町
 の勧工場くわんこうば見物みに行まする度々たびたび、旧のお店がそつくりそのまま
 同たじ烟草店たばこみせの能登のとやといふに成つてゐまするを、何時通つても
 覗のぞかれて、ああ高坂かうさかの録ろくさんが子供であつたころ、学校の行ゆきも
 返どりに寄つては巻烟草のこぼれを貰ふて、生意氣らしい吸立て
 た物なれど、今は何処に何をして、氣の優しい方なればこんなむ
 づかしい世にどのやうの世渡りをしてお出いでならうか、それも心
 かかりまして、実家へ行く度に御様子ごようすを、もし知つてもあるかと
 聞いては見まするけれど、猿楽町ざるがくてうを離れたのは今で五年の前、

根つからお便りを聞く縁がなく、どんなにお懐なつかしう御座んしたらうと我身のほどをも忘れて問ひかくれば、男は流れる汗を手拭にぬぐふて、お恥かしい身に落まして今は家うちと言ふ物も御座りませぬ、寐処は浅草町の安宿、村田といふが二階に転がつて、氣に向ひた時は今夜のやうに遅くまで挽く事もありますし、厭やと思へば日がな一日ごろごろとして烟けぶりのやうに暮してゐまする、貴嬢あなたは相変らずの美しくしき、奥様にお成りなされたと聞いた時からそれでも一度は拝む事が出来るか、一生の内に又お言葉を交はす事が出来るかと夢のやうに願ふてゐました、今日までは入用いりようのない命と捨て物に取あつかふてゐましたけれど命があればこそその御対面、ああ宜わたくしく私を高坂の録ろく之助のすけと覚えてゐて下さりました、

辱かたじけなう御座りますと下を向くに、阿閔はさめざめとして誰れも憂うれき世に一人と思ふて下さるな。

してお内儀かみさんはと阿閔の問へば、御存じで御座りましょ筋向ふの杉田やが娘、色が白いと恰かつかう好がどうだとか言ふて世間の人やみくもは暗雲やみくもに褒めたてた女もので御座ります、私が如何いかにも放蕩のらをつくして家へとは寄りつかぬやうに成つたを、貰ふべき頃に貰ふ物を貰はぬからだと親類の中の解らずやが勘違ひして、あれならばと母親が眼鏡にかけ、是非もらへ、やれ貰へと無茶苦茶に進めたる五月蠅うるささ、どうなりと成れ、成れ、勝手に成れとてあれを家へ迎へたは丁度貴嬢が御懐妊だと聞きました時分の事、一年目には私が処にもお目出たうを他人ひとからは言はれて、犬張子や風車を

並べたてる様に成りましたれど、何のそんな事で私が放蕩のらのやむ
 事か、人は顔の好い女房を持たせたら足が止まるか、子が生れた
 ら気が改まるかとも思ふてゐたのであらうなれど、たとへ小町と
 西施せいしと手を引いて来て、衣通そとほりひめ姫が舞ひを舞つて見せてくれても
 私の放蕩のらは直らぬ事に極めて置いたを、何で乳くさい子供の顔見
 て発ほつしん心が出来ませう、遊んで遊んで遊び抜いて、呑のんで呑んで
 呑み尽して、家も稼業かげふもそつち除のけに箸はし一本もたぬやうに成つた
 は一昨々さきおととし年、お袋は田舎へ嫁入つた姉の処に引取つて貰ひまする
 し、女房にようぼは子をつけて実家さとへ戻したまま音信いんしん不通、女の子で
 はあり惜しいとも何とも思ひはしませぬけれど、その子も昨年さきとしの
 暮チプスに懸つて死んださうに聞きました、女はませな物ではあり、

死ぬ際ぎはには定めし父様ととさんとか何とか言ふたので御座りましょう、今年居れば五つになるので御座りました、何のつまらぬ身の上、お話しにも成りませぬ。

男はうす淋しき顔に笑みを浮べて貴嬢といふ事も知りませぬので、飛んだ我ままの不調法、さ、お乗りなされ、お供をしまする、さぞ不意でお驚きなさりましたろう、車を挽くと言ふも名ばかり、何が楽しみに轆棒かぢぼうをにぎつて、何が望みに牛馬うしうまの真似をする、ぜに錢を貰へたら嬉しいか、酒が吞まれたら愉快なか、考へれば何もかも悉しつかい皆厭やで、お客様を乗せやうが空車からの時だらうが嫌やとあき呆れはてる我まま男、あいそ愛想が尽きるでは有りませぬか、さ、お乗りなされ、お供をしますと進め

られて、あれ知らぬうち中は仕方もなし、知つて其車それに乗れます物か、それでもこんな淋しい処を一人ゆくは心細いほどに、広小路へ出るまで唯道づれに成つて下され、話しながら行ゆきませうとてお関は小棲こづま少し引あげて、ぬり下駄のおとこれも淋しげなり。

昔の友といふ中にもこれは忘れぬ由縁ゆかりのある人、小川町の高坂とて小奇麗な烟草屋たばこやの一人息子、今はこの様に色も黒く見られぬ男になつてはゐれども、世にある頃の唐棧とうざんぞろひに小氣の利きいた前だれがけ、お世辞も上手、愛敬あいけうもありて、年の行かぬやうにも無い、父親てておやの居た時よりは却かへつて店が賑にぎやかなと評判された利口そめらしい人の、さてもさてももの替り様、我身が嫁入りの噂聞え初そめた頃から、やけ遊びの底ぬけ騒ぎ、高坂の息子はまるで人

間が變つたやうな、魔でもさしたか、祟りたでもあるか、よもや只事では無いとその頃に聞きしが、今宵見れば如何にも浅ましい身の有様、木賃泊りに居なさんすやうに成らうとは思ひも寄らぬ、私はこの人に思はれて、十二の年より十七まで明暮れ顔を合せる毎たびに行々ゆくゆくはあの店の彼あすこ処へ座つて、新聞見ながら商ひするのと思ふてもゐたれど、量はからぬ人に縁の定まりて、親々の言ふ事なれば何の異存を入られやう、烟草屋の録さんにはと思へどそれはほんの子供ごころ、先方さきからも口へ出して言ふた事はなし、此方こちらは猶なほさら、これは取とまらぬ夢の様な恋なるを、思ひ切つてしまへ、思ひ切つてしまへ、あきらめてしまはうと心を定めて、今の原田へ嫁入りの事には成つたれど、その際きはまでも涙がこぼれて忘れか

ねた人、私が思ふほどはこの人も思ふて、それ故ゆゑの身の破滅かも
 知れぬ物を、我がこの様な丸まるまげ鬚などに、取とりすま済すましたる様な姿を
 いかばかり面つらにくく思はれるであらう、夢さらさうした楽しらし
 い身ではなけれどもと阿閔は振かへつて録之助を見やるに、何を
 思ふか茫ぼうぜん然とせし顔つき、時たま逢ひし阿閔に向つてさのみは
 嬉しき様子も見えざりき。

広小路に出れば車もあり、阿閔は紙入れより紙幣いくらか取とりい
 出して小菊の紙にしほらしく包みて、録さんこれは誠に失礼な
 れど鼻紙なりとも買つて下され、久し振でお目にかかつて何か申
 たい事は沢山たんとあるやうなれど口へ出ませぬは察して下され、では
 私は御別れに致します、随分からだを厭いとふて煩わづらはぬ様に、伯母

さんをも早く安心させておあげなさりまし、蔭かげながら私も祈りま
す、どうぞ以前の録さんにお成りなされて、お立派にお店をお開
きに成ります処を見せて下され、左様ならばと挨拶すれば録之助
は紙づつみを頂いて、お辞儀申す筈なれど貴嬢のお手より下され
たのなれば、あり難く頂戴して思ひ出にしまする、お別れ申すが
惜しいと言つてもこれが夢ならば仕方のない事、さ、お出いでなされ、
私も帰ります、更ふけては路が淋しう御座りますぞとて空車からぐるま引いて
うしろ向く、其人それは東へ、此人これは南へ、大路の柳月のかげに靡なびい
て力なささうの塗り下駄のおと、村田の二階も原田の奥も憂うきは
お互ひの世におもふ事多し。

青空文庫情報

底本：「にげりえ・たけくらべ」新潮文庫、新潮社

1949（昭和24）年6月30日発行

2003（平成15）年1月10日116刷改版

2008（平成20）年6月10日128刷

初出：「文藝俱樂部・臨時増刊閨秀小説」博文館

1895（明治28）年12月10日

※このファイルには、以下の青空文庫のテキストを、上記底本に
そって修正し、組み入れました。

「十三夜」（入力：青空文庫、校正：米田進、小林繁雄）

※送りがな、振りがなの不統一は、底本通りです。

※底本巻末の三好行雄による注解は省略しました。

入力：酔いどれ狸

校正：Juki

2015年9月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

十三夜

樋口一葉

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>